

# ドバト(カワラバト) 英:Feral Pigeon 学:Columba livia domestica

## 1. 分類と形態

分類: ハト目 ハト科

全長: 31-34 cm 翼長: 222.7±7.62mm  
 尾長: 10.6±1.3mm\* 嘴峰長: 19.3±0.1mm\*  
 ふしよ長: 32.9±0.3mm\* 体重: 314.2±35.63g

杉森(2002), 山階鳥類研究所(1979)に基づく

\* 巣立ち前日の巣内ヒナ

ドバトという種は存在しない。中東、アフリカ、ヨーロッパに現在生息しているカワラバト *Columba livia* を人間が家禽化し、それが再野生化したものがドバトである。この野生化は、一度だけではなく、不定期に繰り返し起きている。世界各地で、伝書鳩やレース用のレース鳩(以下 飼い鳩)が、逃げ出し野生化しているからである。

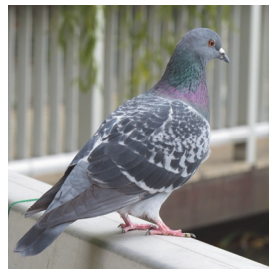


写真1. ドバト

日本では、戦後に伝書鳩ブームが起こり、その際に意図的ではないにせよ、相当数が野外に供給されたと思われる。

ドバトが日本にいつからいたかは、正確にはわからない。平安時代以降に、ドバトと思われる記述があり、江戸時代には確実に輸入されたことがわかっている。明治以降は、軍事通信用(前線と司令部の情報伝達用)の目的として積極的に輸入され、民間でも伝書鳩が飼われるようになった。また戦後は伝書鳩の飼育ブームが起き、1969年には、年間生産羽数が400万羽だったという推定もある(杉森 2002)。

現在、国内で、ドバトの姿をしているものは3つに分けられる。(1) 飼い鳩が放し飼いにされており、夜に飼い主の下に戻るもの。(2) 飼い鳩が、何らかの事情で飼い主のもとに戻らず野生化したもの。(3) 野生のドバトから生まれたドバト。このうち(1)(2)は、足環がついているので、見分けられる。

英名としては、Feral pigeon 以外にも、City dove, City pigeon, Street pigeonと記述されることもある。Rock doveとされることもあるが、これは原種のカワラバトの英名であり、区別するためにFeral rock doveとされることもある。

### 羽色:

個体により違いがある。主要なものとして、翼に二本の黒い線がある個体、全体が黒色、白色、赤褐色の個体、または、これらがモザイクになったものがある。羽色に多型がある理由としては、「飼い鳩の多型を受け継いでいる」、「本来なら羽色の違いによって選択がかかるはずだが、食料が豊富なためにその力が弱い」、「同類交配」などが挙げられている。

### 雌雄および成幼の違い:

雄雌を比べると、オスがわずかに大きい。飼い鳩では、上嘴の基部にある鼻瘤(びりゅう)の白い部分が大きいのがオス、鼻瘤の白い部分は大人になるにつれて白くなる、と言われており、おそらくドバトも同様である。

### 鳴き声:

クルッカーなど。

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

北極と南極を除く世界中に分布している。日本では、北海道から沖縄で見られ、佐渡、隠岐、対馬、奄美などの島嶼にも生息している。小笠原諸島にはいない。

### 生息環境:

商業地のような都市の中心部から、農地と住宅地がまざった都市の外周部までいる。ただし、薄く広くいるのではなく、局所的にいる。具体的には、駅、城跡、神社、寺、公園などに群れている。これらは、人の手によって餌が供給されているか、営巣に適した構造がある場所である。

## 3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
					繁殖期						

### 繁殖システム:

一夫一妻だが、一夫二妻の例もある(杉森 2002)。繁殖は、後述するピジョンミルクによって1年中可能である。札幌でも2月や11月にヒナの観察例がある。飼い鳩は、生まれて半年で繁殖が可能なので、ドバトも同様と思われる。

### 巣(位置、形と材質、大きさなど):

棚状になっている場所に営巣する。都市のなかでは、工場や駅の天井部の配管の上、高架下やビルの窓外の棚状構造、室外機の上、ベランダなどに営巣する。あまり地上に近いところには作らない。巣は単独でつくられることもあるが、何巣か集まってコロニーのようにもなっていることもある。巣材は、わら、小枝などをつかう。巣の作りは簡素で、場合によっては、小枝を並べただけ、さらには巣材を使わない例もある。



写真2. ドバトの巣

### 一腹卵数、卵サイズ、卵色:

卵は2卵、白色で、長径が約39mm、短径が約29mm、重さは約18gである。記録が少なく確かではないが、1卵目を産んだ翌々日に2卵目を産むようである(杉森 2002)。

### 抱卵、育雛期間、巣立ち率:

抱卵は、日中は雌雄交代で行い、夜間はメスが抱卵する。約16日で孵化する。給餌は、ヒナが小さいころは、ハト全般で見られるようにピジョンミルクにより行われる。ピジョンミルクとは、親鳥が食べたものを分解消化し、それを素囊から分泌した粥状のものである。ヒナが成長すると、普通の吐き戻しによる給餌も行う。

孵化後5日くらいで目が開き、17日目まで全身がほぼ羽毛でおおわれる。孵化から28-35日で巣立つ。巣立ち率(巣立ち数/産卵数)は、異なる地域から得られた記録として、30, 48, 62, 75, 76, 80, 92%がある(山階鳥類研究所 1979)。ばらつきが大きく、調査をした場所、年、季節などに大きく影響を受けられると思われる。

## 4. 食性と採食行動

主として、植物食で、樹木の若芽、花の蕾、実を食べる。サクラ、ツバキ、エノキ、クスノキ、ムクノキ、シャリンバイなど、街路樹や公園にある樹木を利用する。他の鳥があまり食べないナナカマドを食べた報告もある(竹中 1994)。人からもらった餌も良く食べる。また、豆類、穀類を食害する。稀な観察として、カタツムリ、ウジ、タニシを食べたという報告があるが、ベアリングの玉を食べた記録もあるので、食物ではなく、砂嚢に用いる小石の代わりに摂取した可能性もある。

## 5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

### ● 侵略的外来種

ドバトは、日本の侵略的外来種ワースト100のひとつに指定されている。理由として、糞害による建物の汚染、農作物の被害、航空機との衝突、オウム病やクリプトコッカス病を媒介する、などが挙げられる。

### ● 個体数の減少

全国的な定量データはないが、東京の浅草寺、明治神宮などで減少していることを示す記録がある。減少要因として、主に次の3つが考えられる。(1)1981年に、ドバトによる害が問題になって、みだりに餌を与えないようにという通達が環境省(当時は環境庁)から出され、寺社における餌の販売、鳩舎の設置などが自粛された。(2)伝書鳩、レース鳩を一般の人が飼うことが減り、供給されるドバトの数が減った。(3)オオタカ、ハヤブサなどが都市に進出した猛禽類に捕食されている。(1)について補足すると、以前は寺社で積極的にハトを飼っていた。特に、八幡宮の系列では、ハトは神の使いとして大事にされていた。

### ● ドバトの黒色化

柘植(1994)は「東京のハトは大阪に比べて黒いものが多く、その理由は、東京にはカラスが多く、カラスが白いハトを優先して狙うから」という仮説を検証するために、東京で大阪よりも黒いハトの割合が高いこと、東京で大阪よりもカラスの数が多きことを確かめている。この話は、中学校国語の教科書にも掲載され話題になった(なお、柘植はこれらの結果から「東京のハトが黒くなったのはカラスによるものであることが証明された」と考えているが、カラスの関与そのものが検証されたわけではないので、少し勇み足である)。

Chatelain et al (2014) は、メラニンを多く持つ黒いハトほど、血中にある有毒な亜鉛を、羽に集めて無害化することができることを示し(メラニンが亜鉛と結合する)、そこから、黒いハトは、人間活動によって亜鉛が多く生み出される都市環境への適応ではないかと、述べている。



写真3. 様々な色のドバト

### ● 求愛ディスプレイの多様さ

ドバトの求愛は、多様である。オスが胸をはって、その場でくるくる回ったり、互いに甘噛みをしたり、オスがメスの羽づくろいをしたりする。また、雌雄でおなじ行動をとることも見られている(首を同じ方向に曲げる、同じ速度で並走する、同じ軌道で飛ぶ、など)。オスだと思われるが、飛ぶ時に両翼を背中から打ち付ける羽打ちもする。これらの行動は、おそらく儀式化されており、オスの行動中にメスが見限ることもあるので、ひとつひとつに意味があると思われる。



写真4. ドバトの求愛。左側がオスで右がメス

## 6. 引用・参考文献

- Chatelain M, Gasparini J, Jacquin L & Frantz A. 2014. The adaptive function of melanin-based plumage coloration to trace metals. *Biol. Lett.* 10: 20140164.
- 堀田正敦・鈴木道男. 2006. 江戸鳥類大図鑑. 平凡社, 東京.
- 加茂儀一. 1973. 家畜文化史. 法政大学出版, 東京.
- 黒岩比佐子. 2000. 伝書鳩—もうひとつのIT. 文春新書, 東京.
- 三上修. 2015. 身近な鳥の生活図鑑. 筑摩書房, 東京.
- 杉森文夫. 2002. ドバト *Columba livia* var. *domestica* (Feral pigeon). in 環境省環境保健部環境安全課環境リスク評価室 野生生物のダイオキシン類蓄積状況等調査マニュアル, 環境省環境保健部環境安全課環境リスク評価室
- 竹中万紀子. 1994. ナナカマドの果実を樹上で食するドバト *Columba livia*. *Urban Birds* 11: 44-47.
- 柘植達雄・NHK「都会の自然誌」取材班. 1994. カラスがハトを黒くする?: 生き物たちの近況報告39話. 情報センター出版局, 東京.
- 柳澤紀夫・川内 博. 2013. 明治神宮の鳥類第2報. 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書166-221.
- 吉原謙以知. 2014. レース鳩 知られざるアスリート. 幻冬舎スネッサンス, 東京.
- 山階鳥類研究所. 1979. ドバト害防除に関する基礎的研究. 山階鳥類研究所, 東京.

## 執筆者

三上 修

北海道教育大学 教育学部 准教授

ドバトを研究したことはないのですが、筑摩書房から出版された「身近な鳥の生活図鑑」を書く際に、いろいろ調べたので詳しくなりました。ドバトは、人の歴史との関わりのなかでも面白く鳥ですし、実害を解決するという大義名分も使える意味で良い研究対象ではないかと考え始めています。簡単に観察でき、捕まえても羽色でかなりの数の個体識別ができるという点も研究に適しているそうです。海外でも、Cornell大学を中心に市民科学としてpigeon watch projectが展開されています。

